

研究ノート

幼少期の英語体験が英語親和性に与える影響

— 教育実践への示唆 —

橋元 知子¹⁾The Impact of Childhood English Experiences on Affinity for English:
Implications for Educational Practice

Tomoko Hashimoto

要 約

本研究は、幼少期の英語体験が英語親和性にどのような影響を及ぼすかを検討したものである。幼少期に英語を経験した3名の大学生を対象に半構造化インタビューを実施し、質的に分析した結果、三つのトピックが抽出された。第一に、幼少期に英語体験を共有した大人との関係性が英語への親和性の形成に大きく寄与する可能性が示された。第二に、初期段階に培われた英語に対する有能感と後年の理解困難感との乖離が、現在の英語に対する態度を規定する可能性が明らかになった。第三に、一度低下した親和性も協同学習を通じて回復し得ることが示唆された。これらの結果は、幼少期の英語体験が肯定的・否定的両方の側面で学習者に影響を及ぼし、英語に対する長期的な親和性に作用する潜在性を示している。実践においては、安心感に基づく大人—子ども関係の確保、幼少期に培われた有能感の持続的な保障、そして精緻に設計された協同学習の導入が重要であることが明らかとなった。

キーワード：英語体験、協同学習、英語親和性、有能感、幼少期の英語教育

1. はじめに

近年、幼少期の初期段階で英語を取り入れる園が増え、私立幼稚園の65.3%が通常保育時間に英語を実施している（ベネッセ教育総合研究所, 2024）。これは2007/2008年比では+17.7%と最も伸び率が高い園活動であり、幼少期から英語に触れることは増えつつある。

このような中、英語教育を受けている幼少期の子どもを対象とした研究が実施されており、内容とし

ては、幼児をどう動機付ければ良いのか（e.g., Hashimoto, 2025a, 2025c; Pinter, 2015, 2017）について、また、英語発話を促すためにはどのような手立てがあるのか（e.g., Hashimoto, 2025b; Hashimoto & Sato, 2024; Rokita-Jaskow, 2022）等を扱っている。過去の幼少期の英語体験の影響についての研究も一定数あるが（e.g., DeKeyser, 2000; Kachi, 2013; 山本, 2020）、その結果は一律ではない（e.g., Nikolov & Krevelj, 2024）。肯定的な影響を報告している研究の多くは英語が第二言語環境 [English as a Second

1) 橋元 知子 東京未来大学子ども心理学部 (Tokyo Future University) hashimoto-tomoko@tokyomirai.jp

Language (ESL)] であり、日本のように英語が外国語環境 [English as a Foreign Language (EFL)] においては、幼少期に受けた英語教育の効果は限定的とする研究もある (e.g., Larson-Hall, 2008)。

このように、幼少期における英語体験の是非については依然として結論が出ておらず、さらなる検討が求められる分野である。特に、EFL環境下で幼少期に英語を体験した子どもが、具体的にどのような経験を積み、それがその後の教育にどのような影響を及ぼすのかを検討した研究は存在するものの (e.g., Chen, 2022)、その数は少ない。また、英語親和性について調べた研究も限られている。よって、本研究は、この穴を埋めることを目的として実施された。

2. 目的

本研究は、幼少期の英語体験がその時とその後の英語親和性に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

3. 方法

研究方法としては、幼少期に英会話教室や幼稚園・小学校などで英語を体験した3名の大学生を対象に、その経験を質的に分析・考察し、幼少期の英語体験の影響と教育的意義について検討した。被験者は、4年制大学の保育者養成課程に在籍し、必修英語科目を履修している大学1年生で、男子2名 (学生A・C)、女子1名 (学生B) である。図1に被験者の属性を示す。

学生	A	B	C		
性別	男	女	男	<i>M</i>	<i>SD</i>
英語学習開始年齢 (__歳)	5.20	5.33	3.22	4.57	1.21
現在の年齢 (__歳)	19.00	18.50	18.42	18.64	0.31
幼少期の英語に対する親和性★	5.00	5.00	4.00	4.67	0.58
現在の英語に対する親和性★	1.00	4.00	2.00	2.33	1.53

★1 = 全くない～5 = 非常にある、を被験者が自ら点数化。

図1 被験者の属性

手続きとして、まず幼少期から英語学習を開始したと回答した3名の学生に半構造化インタビューを実施し ($M_{min} = 50.34, SD = 1.75$)、録音した上で逐語的に文字起こしを行った。インタビュー項目として、①属性、②英語に対する親和性、③英語学習歴を聞いた。①の中で「幼少期の英語に対する親和性」と「現在の英語に対する親和性」については、5段階のリッカート尺度 (1 = 全くない～5 = 非常にある) で回答してもらった。②、③に関しては、楽しかった経験や困難であった経験を語る際に具体的な状況の説明を求めた。

分析においては、それぞれをケーススタディとして扱い (Duff & Anderson, 2016)、幼少期の英語体験がその後の英語教育や英語に対する印象に及ぼす影響と教育的意義に焦点を当て、データをコード化し、トピックを抽出した。この際、帰納的アプローチを用い、データから読み取れる事柄に注目した。ケーススタディは、単一の事象を多角的要因 (社会的・文化的・個人的等) や偶発的事象を含めて説明可能であり、また対象が人である場合には、その個人の経験や意味づけを詳細に把握できる有効な方法である (Duff & Anderson, 2016)。以上の理由から、本研究の目的に最適な手法と判断し、採用した。

倫理的配慮については、研究者の所属機関の倫理審査委員会による承認を得た上で、研究開始前に書面による同意書を提示し、口頭で説明を行った。参加は任意であり、途中での辞退が可能であること、結果の公表に際しては匿名性を十分に確保すること等を明記した。その後、質疑応答の機会を設け、署名による同意を得た。

4. 結果と考察

半構造化インタビューのデータを分析した結果、3つの共通したトピックが明らかになった。以下、各トピックとその例を提示する。「A」は「学生A」、「B」は「学生B」、「C」は「学生C」、そして、「R」は「本研究の研究者」を指す。

① 英語体験に関わった大人との関係が幼少期の英語に対する親和性に影響を及ぼす

第1のトピックは、幼少期のこどもが英語に対して関心や親近感を抱く過程において、英語体験を共有した大人との関係性が重要な役割を果たすことであった。

Aの語りからは、単調で短い表現であっても、信頼する大人とのやりとりであれば「楽しい」と感じられることが示唆された。

A：「保育園の中で先生がきて、This is a pen みたいなの。」

R：「その時は嫌いじゃなかった？」

A：「その時は楽しかったですね。」

Bも、幼稚園での英語教材を用いた活動について「楽しかった」と振り返っており、ポジティブな大人との関わりが親和性の形成を支えることが示された。

R：「結構小さい頃から。。。5歳の頃から英語やっているんだものね。」

B：「英語教材のゲームがあって、名前忘れちゃったんですけど、なんか、こう、PigとPick みたいなの。そう。EggとBigの音を聞き分ける、みたいなのをやってて。それが多分幼稚園の頃だった。」

R：「そうか。その時は(英語が)楽しかったのね。」

B：「はい。」

一方、学生Cの語りからは、英語体験を共有した大人との否定的な関係が、英語親和性を低下させる要因となることも明らかになった。特に幼稚園時代に恐怖心を抱かせた教員との体験は、その後の英語への印象を消極的に規定していた。

R：「3歳から英語開始したんですね？」

C：「あの～。自分、あの△△インターナショナルスクールに行ってた。幼稚園。(中略)もう幼稚園の頃から先生が怖かったんですよ。結構

記憶なくて。記憶から消してるくらい怖くて。」

R：「その英語の先生が？」

C：「はい。その幼稚園の先生が。名前も覚えているんですよ。」

R：「え？なんていう先生？」

C：「シルビア (仮名)」。

R：「シルビア先生怖かったんだ。」

C：「黒人の人で。とりあえず怖かった記憶が。」

R：「へ～。本当。じゃあそのシルビア先生が怖い。英語嫌い！ってなっちゃったのかな？」

C：「そう。最初、幼稚園の年長の担任だったんですよ。」

このように、幼少期における大人との関係性は、英語に対する親和性の醸成において肯定的にも否定的にも働く可能性がある。

幼少期の初期段階における質の高い教育の重要性は、OECD (2021) のInternational early learning and child well-being study, assessment frameworkで繰り返し強調されている。また、「幼稚園教育要領」(平成29年告)においても、こどもが教員や仲間とことばを通じて伝え合う楽しみを経験する意義が述べられている(文部科学省, 2019)。Cの語りは、この「楽しさ」が欠如した場合には、むしろ伝え合いたいという意欲が阻害され、英語への親和性が低下する可能性を示唆している。

② 初期の英語体験がもたらす英語についての有能感と、その後英語が理解できなくなった時のギャップが、現在の英語に対する親和性に影響を及ぼす

第2のトピックは、初めに英語と触れ合った時に培われた「できる」という感覚(有能感)が、その後の学習過程で遭遇する理解困難感と乖離することで、英語に対する態度を左右する可能性であった。

Aは、幼少期初期の活動を「楽しかった」と振り返りつつも、学年が進むにつれて理解が難しくなり、苦手意識が芽生えたと語った。

R:「小学校で英語は?」

A:「5,6年生でやりました。公立の学校で英語っていうのが授業でありました。」

R:「その時は楽しかった?」

A:「その時は楽しくなかったんですよ。保育園の時は先生が日本人だったんですけど、小学校はガチで外国人で、『こいつ、なに言ってるだろう?』ってなって。なに言ってるか全く分からなかったんですよ。」

この語りは、初期に感じた親和性が必ずしも持続せず、後年の学習困難感が英語への態度に影響し得ることを示唆している。Fredricks et al. (2004) が指摘するように、学習者の有能感と実際の学習要求との間に不一致が生じると、動機づけや学習意欲に負の影響を与える可能性がある。本研究においても、初期の成功体験が後年の困難感との乖離によって否定的な態度へと転じるリスクが示された。

次に、Bの語りを紹介する。

B:「あはは。なんかもう、本当に自分の頭の出来の悪さ。あはは。そう。」

R:「そっか。それは自分の中で、小さい頃にやっていて、英語ができるだろう、っていうのがあったのかな?」

B:「そう。ま、多分。あとなんか、英語に対して、なんだろう?なんか、こう、勉強して覚えるものじゃないっていうイメージがあって、別に英語がめっちゃめっちゃできるってわけでもないんですけど、なんか、そう。。。別に、YesとNoと単語だけでできれば、相手もわかってくれるでしょ、みたいな。」

R:「うん。」

B:「そう。日本に来る外国人も大体そんな感じじゃないですか?『わかりました』とか『ありがとうございます』って言えば、別に。言語が大切だと思ってなかったんで。そう。」

R:「そうか、そうか。」

B:「で、テストの点が悪いと気分が落ち込む、みたいなので、『勉強が〜!』ってなっちゃうみたいな。」

Bはインタビューの中でしばしば「自分は頭が悪い」と自己否定的に笑いながら語る姿が印象的であった。しかし、幼少期には英語を理解できていた成功体験を覚えており、それと現在の自分を比較して焦りを感じる場面もあったようである。しかし、Bは英語について、完璧に理解していなくてもYesやNo、単語だけで伝わるとの認識を示しており、このような言語観の個人差(Dörnyei, 2005)が、比較的高い現在の英語に対する親和性(4.0)に繋がっている可能性が考えられる。

一方、Cは高校以降、英語に対して強制的に学ばされているという認識を強く持ち、全く理解できなかった、やる気がなかった、と語っている。こうした経験は、幼少期と比べて英語親和性の低下に直結していたようである。

C:「(高校では) 英語は本当に。なんも理解してないですよ。」

R:「本当?でも問題集は開いてみた?」

C:「一回くらいはある。でも本当に強制だったんで。」

R:「あ、本当?でもそれは全然勉強してないときでしょ?」

C:「一切してないです。こっちもやる気なくて。」

BとCに共通しているのは、幼少期以降の英語体験がテストや強制的な課題解決といった、外部からの圧力に支配されていた点である。すなわち、両者の英語体験は外発的な動機づけ要因に規定されたものであったと考えられる。Ryan & Deci (2017) の自己決定理論によれば、人には自律性・有能性・関係性という三つの心理的欲求があり、これらが満たされることで内発的動機づけが上昇する可能性が高い。本研究のデータをみると、A・B・Cのいずれ

においても、後年の英語体験では、英語がわからなかった・できなかったと述べていることから、有能性が十分に満たされなかった恐れがある。図1に示されるように、全員が幼少期には比較的高い英語親和性があったと回答していることから、その後の経験が現在の親和性の低下に影響したと推察される。

③ 英語に対する親和性を再度高める方法として協同学習が有効な可能性がある

第2のトピックで示されたように、今回の参加者全員の現在の英語親和性は幼少期に比べて低下していた。しかし、第3のトピックとして、協同学習の経験が親和性を再び高める有効な契機となり得ることが明らかになった。

Aは、ペアワークを通して仲の良い友人と活動することで英語学習を肯定的に捉えられるようになったと述べている。

A：「英語でこんなにペアワークやったのは初めてです。人と話すのは好きですが、目の前に課題があると嫌いです。わからないから好きじゃないんですよ。あとは人じゃないですか？嫌な子だとやりたくない。でも□□とかはめっちゃ仲いいんですよ。遊びに行くくらい。『英語』と『情報』とかは一緒だったんで、仲良くなった。」

また、Bは、高校時代に行った世界の給食をテーマにしたグループ発表を「楽しかった」と振り返り、協同的な作業や発表を通じて英語に積極的に関わったことを強調した。

B：「あと、私が高校の時にやって楽しかったことがあって、世界の食べ物？給食の話をやったんですよ。その時に世界の給食についてグループでパワーポイントを作って英語で発表しようっていうのがあって、そのパワーポイン

トを作るのも好きだし、パワーポイントを作って英語で発表っていうのも自分としてはとても楽しくて。いい経験にもなったし、とても楽しかったし、そこで単語も知れたりとか、先生に発音の仕方とかを教えてもらったりして、グループでそういう発表するとかっていうのは楽しかったです。」

更に、Cは大学に入ってから経験について話した。彼は大学でのグループ活動を通じて新しい関係を築き、授業外の交流にまでつながったことを語った。

C：「後期。そうですね。〇〇さんはそれまで一切喋ったことがなかったんですけれど。」

R：「あ、本当？」

C：「ま、そうですね。〇〇さんって考えたら、結構一緒にやるから、苦じゃないです。」

R：「そっか、じゃあ良かったのかな？」

C：「あ、じゃあ良かったんっすかね？うん。そうですね。よかったです。」

R：「クラス外で会ったときとか話すの？」

C：「話しますね。今は普通に。そう。英語で話すようになったから、クラス外でも話しますね。」

これらの事例から、英語での協同学習が学習者同士の関係性を深め、楽しさや肯定的態度を喚起する可能性が示された。また、Cの事例は、クラス内での良好な関係性がクラス外の交流にも波及することを示している。一方で、Aの語り（「あとは人じゃないですか？嫌な子だとやりたくない。」）からは、協同学習の効果はメンバーの組み合わせに左右されることも確認された。これは、Johnson & Johnson (1999) が指摘するように、協同学習が成立するには適切なグループ編成が不可欠であるという理論とも一致している。したがって、Hashimoto (2022) が述べているように、教員によるグループ構成の配慮

は、協同学習を効果的に機能させる上で重要な要素といえる。

5. 結 論

本研究では、幼少期の英語体験がその後の英語に対する親和性にどのように影響するかを検討するため、3名の大学生の語りをケーススタディとして質的に分析した。その結果、①英語体験を共有した大人との関係性、②英語との初期の触れ合いに培われた有能感と後年の理解困難感との乖離、③協同学習による親和性の回復、の三つのトピックが抽出された。

まず、トピック1からは、幼少期に英語を共有した大人との肯定的な関わりが英語への親近感を育む一方、否定的な関係は親和性を低下させる可能性が示された。これは、幼児教育における教員の言語的・情緒的関わりの重要性を指摘する先行研究(OECD, 2021; 文部科学省, 2017)とも一致する。

次に、トピック2では、幼少期に形成された「英語ができる」という有能感と、後年の学習理解困難感との乖離が、英語に対する態度を否定的に規定する潜在性が明らかになった。これは、学習者の有能感が動機づけにおいて中心的役割を果たすとする自己決定理論(Ryan & Deci, 2017)を支持するものであり、幼少期の成功体験がその後の学習段階で維持されるか否かが重要であることを示唆している。

さらに、トピック3からは、協同学習が、低下した英語親和性を回復させる有効な要因となり得ることが確認された。学習者同士の関係性が学習態度を改善することは、協同学習の有効性を強調するJohnson & Johnson(1999)の知見とも合致している。ただし、Aの事例に見られるように、グループ編成には配慮が必要であり、教育実践における教員の役割が大きいことも明らかになった(Hashimoto, 2022)。

以上のことから、幼少期の英語体験は肯定的・否定的のどちらにもなり得、長期的に学習者の英語親和性に作用する潜在性が示された。

6. 教育的示唆

本研究の結果は、幼少期における英語体験が学習者のその後の英語親和性に長期的影響を及ぼす可能性を示している。教育実践においては、次の点が示唆される。

- ・教員との関わりの質の重要性: こどもが英語を「楽しい」と感じるかどうかは、大人との関係性に大きく依存する。したがって、単なる英語活動の導入にとどまらず、教員がこどもにとって安心感や信頼感を与える関わりを行うことが求められる。

- ・有能感を持続させる仕組み: 初期の英語体験時に育まれた「できる」という感覚を、後年の学習段階で維持・発展できるように、発達段階に応じた教材や学習方法の工夫が必要である。

- ・協同学習の活用: 英語に対する親和性を回復・強化する手段として、協同学習は有効である。ただし、グループ編成や活動設計に配慮し、学習者間の関係性を支える環境づくりを行うことが、教員の重要な役割となる。

すなわち、教育的実践においては、まず教員とこどもの関係性に細心の注意を払うとともに、幼少期の学習経験を単発的な出来事として終わらせず、後続の学習過程において有能感が持続的に育まれるような働きかけが求められる。また、協同学習を通じてこども同士の相互関係が発展するよう支援することも不可欠である。

7. 今後の課題

本研究にはいくつかの課題がある。第一に、対象者が3名の大学生に限定されており、結果の一般化には慎重さが求められる。第二に、データは回想に基づくものであり、幼少期の体験や感情が再解釈されている可能性がある。

今後の研究では、より多様な対象者を含めた縦断的研究や、量的データを補完的に用いた混合研究方法による検証が求められる。また、教員の視点を加えることで、こどもの英語体験と親和性形成を取り巻

く教育環境の包括的理解が進むと考えられる。

【参考文献】

- ベネッセ教育総合研究所. (2023). 第6回幼児の生活アンケート.
- ベネッセ教育総合研究所. (2024). 第4回幼児教育・保育についての基本調査～ダイジェスト版～. ベネッセコーポレーションベネッセ教育総合研究所.
- Chen, S., Zhao, J., de Ruiter, L., Zhou, J., & Huang, J. (2022). A burden or a boost: The impact of early childhood English learning experience on lower elementary English and Chinese achievement. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 25 (4), 1212-1229. <https://doi.org/10.1080/13670050.2020.1749230>
- DeKeyser, R. M. (2000). The robustness of critical period effects in second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, 22, 499-533.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Duff, P. & Anderson, T. (2016). Case study research. In J.D. Brown & C. Coombs (Eds.), *Cambridge guide to language research*. (pp. 112-118). Cambridge University Press.
- Fredricks, J. A., Blumenfeld, P. C., & Paris, A. H. (2004). School engagement: Potential of the concept, state of the evidence. *Review of Educational Research*, 74 (1), 59-109. <https://doi.org/10.3102/00346543074001059>
- Hashimoto, T. (2022). *Motivational effects of variations in sequence of cooperative learning activities* (Publication No. 32682-1067) [Doctoral dissertation, Meiji University]. Meiji Repository. https://www.researchgate.net/publication/361582188_Motivational_Effects_of_Variations_in_Sequence_of_Cooperative_Learning_Activities
- Hashimoto, T. (2025a). Enhancing intrinsic motivation and internalization in very young learners' speech production: Insights from an English immersion kindergarten classroom in Japan. *International Journal of Early Childhood Education*, 32, 123-141.
- Hashimoto, T. (2025b). Strategies to improve children's English speech production in kindergarten immersion settings. In S. A. David (Ed.), *Emerging trends in Education* (pp. 1-13). Docens Series in Education.
- Hashimoto, T. (2025c, August 29). Supporting well-being and language acquisition in early childhood immersion classrooms [Conference presentation]. 2025 New Zealand Psychological Society Annual Conference, Hamilton, NZ.
- Hashimoto, T., & Sato, K. (2024). Investigating pre-primary school children's interest and mastery of the alphabet and vocabulary: Implications for vocabulary instruction and learning in primary school. *Tokyo Future University Bulletin*, 18, 127-136.
- Johnson, D. W., & Johnson, R. T. (1999). *Learning together and alone: Cooperative, competitive, and individualistic learning* (5th ed.). Allyn & Bacon.
- Kachi, R. (2013). Possible influence of the introduction of English education to elementary schools on college students' mentality. 名古屋学院大学論集 言語・文化篇, 25 (1), 173-182. <https://doi.org/10.15012/00000715>
- Larson-Hall, J. (2008). Weighing the benefits of studying a foreign language at a younger starting age in a minimal input situation. *Second Language Research*, 24 (1), 35-63.
- 文部科学省. (2017). 幼稚園教育要領 (平成29年告示).
- Nikolov, M., & Krevlj, S. L. (Eds.). (2024). *Early foreign language learning and teaching: Evidence versus wishful thinking*. Multilingual Matters.
- OECD (2021). *International early learning and child well-being study, assessment framework, OECD Education Working Paper, No. 246*.
- Pinter, A. (2015). Reflections on teaching young learners. *Modern English Teacher*, 24 (1), 4-6.
- Pinter, A. (2017). *Teaching young language learners* (2nd ed.). Oxford University Press.
- Rokita-Jaśkow, J. (2022). Teaching foreign languages at the pre-primary level in a monolingual setting: the case of Poland. *Porta Linguarum An International Journal of Foreign Language Teaching and Learning, Menograph V*, 31-42. <https://doi.org/10.30827/portalin.vi.26218>
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. The Guilford Press.

山本由実. (2020). 早期英語教育および渡航経験が大学生の情意面に与える影響：2019年質問紙調査より. *日本児童英語教育学会研究紀要*, 39, 33-47.

付記

本研究は、日本保育学会第78回大会における発表内容を基盤として発展させたものである。また、本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号：23K12260）の助成を受けて実施された。

（はしもと ともこ）

【受理日 2025年11月19日】